

林業のススメ

「ふるさとの木を生かす」



青森県の家づくりには、青森県の木を使おう――。木材の地産地消は、森林の間伐を進め、放置されていた山の整備につながる。間伐など山仕事を担うのが林業で、木材の地域循環は林業の復興にもつながる。その啓発の一環として発行している『青森県産材でエコな家づくり』。今回の巻頭特集では、木材の価格低迷や機械化という林業の過渡期を乗り切ってきた(有)三浦産業(南津軽郡大鰐町)の三浦隆彦社長と、チェーンソーでの伐採体験で「林業に目覚めた」というウッドラック(青森市)の石村真弓さんにスポットを当てた。

(有)三浦産業 三浦隆彦社長

苗木を植えても、成木に育つまでには50年、100年もの歳月がかかる。すぐには育たないところが林業の特徴だ。木だけでなく、人も、山の現場で一人前として働けるようになるには10年かかる、と三浦隆彦社長は話す。経験を積むほかはない。厳しい道のりではあるが、「やる気のある人なら受け入れる準備はある」と門戸を開く。会社も、「人」を育てる「山」のようなところ——と、この道30年の経営者が語りかける。

同じではない山の地形 木も一本一本全部違う

三浦社長 「その人が林業に向くかどうかは、外見の判断だけでは分かりません。やる気がある、というその人の言葉を信用するしかありません。ただ一つ言えることは、表面的な「格好」だけに憧れてきても長続きし

ないということです。チェーンソーで木を伐り倒すのが林業——と、テレビの番組などで見た伐倒シーンだけに感化されて、『林業やってみたいんですけど』と電話がかかってくる若者もいるんですが、たいがいは長続きしませんね。伐り倒すだけが林業じゃありませんからね。それに人里離れた山の中が仕事場ですから、だれも見えていないわけですよ。そういう仕事なんだという程度覚悟を持って向き合わないと、まずだめですね。もともと、だれもやらないうちから達観できる人はいませんが、毎日毎日同じことを10年も続けていけば、山というのはさらにもっと深い場なんだということが分かってきますよ。一つとして同じ地形はないし、一本として同じ木もありません」——チェーンソーのエンジン音



林野庁の「緑の雇用担い手対策事業」の助成を受け全国の森林組合や事業体では林業就業者を対象に研修を実施している。写真は大鰐町の山林で行われた3年目研修のミーティングで、講師の三浦隆彦社長(左)が安全第一の徹底を呼びかける

が林業に興味を抱くきっかけになるのでしょうか。
三浦社長 「ないとは言えませんが、でも、毎日毎日木を伐る作業ばかりじゃありませんし、それに、ゴルフのギャラリームたいに取り囲む観衆がいるわけでもありませんしね……。苗木

木を植えて育てる保育（造林）も大事な仕事です。だれも見えない山の中でそういう作業を黙々と地道に続けていかなければなりません。ですから、高卒とかあまり若いうちにこの仕事に就くと、どうしてもテレビなんかで都会の派手な世界が刺激的に目に入ってきて、自分のやっている仕事がすごく地味でつまらないものと思えてくる。そうなるとう気持ちが離れてしまつて、結局は去つていく。一



概に高卒は難しいというわけじゃありませんけど、社会経験を積んできてからこの仕事に就いた人は割と長続きしているのをみれば、そういう傾向はあるということですね」

三浦産業に入社して、長く続いている人は、仲間たちと早く溶け込んでいる、と三浦社長はみる。溶け込むには、自分から進んで話しかける。話しかけられれば相手も応える。早く打ち解けたほうが相手もいろいろ



チェーンソーで立木を伐倒する。そばで指導する三浦社長

教えてくれるし、その分ものを早く覚える。その反対だと、どうしても孤立し、結局は居づらくなつて離れていくのはどの仕事も同じだ。

——いつごろから跡を継ぐとを考えていたのですか。

三浦社長 「高校の頃はまるで考えていませんでしたよ。今の高校生だつて、そりゃ中には自分の将来を真剣に考えている生徒もいるかもしれませんが、でも、取りあえず入れる大学に入って、あるいは受かった職場に就職して、それからゆっくり考えようというのが大半なんではないでしょうか。私もそうでしたよ。高校を卒業して、七戸町の青森県営農大に進みましたが、その2年間は私の「模索」の時期でした。父は特に何も言いませんでしたが、内心では、私が継ぐものと決めていたようです。営農学校を出て、あるところに勤めたいと父に話したら、「だめ」と言われたんです。「だめ」は、「継げ」とい

う意味でしたね。私は二十歳になつていました。

——山に入って初めのころに学んだことは何ですか。

三浦社長 『三角関数』です。数学で習つた三角関数。授業のときにはよく理解できませんでしたが、空中に張つたワイヤーロープを使って伐採した木を林道端などに集める方法なんです。そのときに、ワイヤーの角度によつてどれくらいの力がワイヤーにかかるか（張力）を計算するのにその三角関数を使うんですよ。ああ、なるほどこれが関数なんだつて合点する思いでした。学校の勉強なんて面白くもなんともありませんでしたけど、山に入ったおかげで、三角関数は生きた知識として身に付きましたよ。

苦難の「木材価格低迷」 高性能林業機械を導入

それまで右肩上がりだった青森県における木材（素材・丸

大) 価格が、すくと落ちるよ
 うに暴落したのは1980年
 (昭和55年)のこと。長引く価格
 低迷の始まりだった。このころ
 に三浦社長は林業に就いたの
 である。それまで手仕事为主
 だった林業業界で、作業効率を
 向上させるためのハーベスタな
 ど機械導入が盛んになってい
 く。伐倒や枝払い、玉切り、集積
 までを1台で行える高性能林
 業機械がハーベスタ。集めた丸
 太を載せて山を下りる機械が
 フォワーダ(積載式集材車両)。
 機械化が進み、操作するオペ
 レーターを育てることも経営
 者の仕事として加わった。

三浦社長 「二人前に機械を操
 作できるようにするまでも5
 年はかかります。いずれにせよ
 さつきも話しましたように木
 も人も育つまでに時間がかかる
 んです。途中で挫折しないため
 には、もちろん本人のやる気か
 がいちばん大事ですけど、挫折
 しない職場の環境づくりも大
 事です。新人が入社しても、歳
 の離れた先輩者ばかりだと話
 も合いませんしね。だから、年
 輩者がいて、その下の年齢の社
 員が何人かいて、その下に若い
 世代がいて、といった具合に大
 人数の家族みたいな構成になっ
 ていないと、新人は育ちにくい
 ですね」

——どんなところに林業のや
 りがいを感じますか。
三浦社長 「請け負った仕事
 を、ともかく安全にこなすこと
 が最優先で、やりがいを感じて
 いる暇なんてないとい
 うのが現実ですね。自治
 体とか森林組合などか
 ら仕事を依頼されて山
 に入る。いきなり立木りゅうぼくを
 伐採するのではなく、現
 場を見て、まず道をつけ
 る。作業路ですね。担当
 者の経験に基づくと感覚
 で道をつけていきます。
 土木や建築現場のよう
 に設計図というものが
 ないから、山を見る目だ
 けが頼りなんです。同じ

山はないし、木も1本1本全部
 違う。おまけに重い。樹齢50年
 くらいで2トンもある。常に予
 期せぬ危険性を孕はんだ仕事が
 林業です。一瞬たりとも気を抜
 けない。ただ、7〜8メートル
 に育ったスギを久しぶりに目に
 したときには、自分の子供の成
 長した姿を見たように嬉し
 かったですね。それが、やりが
 いっていえばやりがいですか
 ね。20年余り前の、台風19号のと
 きに大鰐の山は甚大な被害を
 受けたんです。何十年もかけて
 育てた樹木があらかたなき倒
 されたのですから大打撃でし
 た。それでもまた苗木を植えて
 育てていかなければならない。
 あのとくに植えた苗木が、20
 年経って、樹高7〜8メート
 ルに育ったんです。木を育てる
 仕事をしているんだって再認識
 しましたね。このスギを、私の
 次の世代が受け継いで育ててい
 くんです」



林業機械のザウルスで作業路をつける

素材生産の場であった。伐った

ら植える”を継承することに
よって森林を維持し、木材を生
産して林業関係者は恩恵を受
けてきた。国産材の価格低迷に
より、間伐されぬまま放置され
た森林が荒れていると問題視
されてから久しいが、温暖化の
問題から二酸化炭素を吸収す
る森林の機能が再評価された。
山を守ることは地域の環境保
全につながる。そこで林野庁が
2003年(平成15年)に山の
仕事の担い手を育てる対策事
業『緑の雇用』を始めた。林業に

若返りの風が吹き出した。

三浦社長 「木は、育つ資源で
す。近くの山に豊富にある、持
続可能な資源です。育つまでに
時間がかかるからこそ、育てる
人も、バトンをつなぐように、
年長者から若い世代へと技術
を引き継いでいかなければなり
ません。林業業界は世代交代が
進んでいます。やってみたい、と
意欲のある人は、受け入れませ
よ」

■(有)三浦産業

南津軽郡大鰐町早瀬野字坂本89の1
電話017214814450



プロセッサーでスギを玉切りする

ウッドトラック 石村真弓さん

スギの幹に背中をあて、右手
を直角に上げて正面を差す。力
を込めた指先の前方、樹高15
20メートルのスギが並び立つ
間に立ててある小枝は、これか
らチェーンソーで伐るスギが倒れ
る位置を示す目印だ。

「では、いきまーす」

ヘルメット姿で声をあげたの
は、女性であった。石村真弓さ
ん。薪ストローブ販売店『ウッド
ラック』(青森市)のスタッフで
ある。チェーンソーのスタター
ロープを2度、3度……と引き

上げるうちにエンジンがかかっ
た。吹かすとバイクそっくりの
エンジン音がスギ林に鳴り響い
た。

チェーンソーでスギ伐倒 講習受け女性キコリに

2013年6月9日―三
沢市の山林で「実践的キコリ養
成講座」が開かれた。個人でも
間伐など山林の手入れができ
る自伐林業方式を広め、山を
守る活動に結び付けようとN
PO法人・青森バイオマスエネ



チェーンソーで伐るスギが倒れる位置を確認する石村さん

ルギー推進協議会（高橋博志理事長）が開催、全国から28人が参加した。ほとんどが男性陣の中に石村真弓さんの姿があった。

自伐林業方式とは、山主自ら木を伐り、搬出して、販売する、という小規模な林業スタイル。一人でも低コストで始められることから全国的に普及しつつある。講座では、林材業安全技能師範として高名な小田桐久一郎氏の指導でチェンソーによる伐木や搬出などの林業技術を学び、修了者には伐採作業員に必要とされる「チェン



チェンソーで木に切込みを入れる

ソー取扱技能特別教育修了証」が交付される。「キコリ」として仕事ができるようにと石村さんも挑戦したのだ。

石村さんが、チェンソーのバー（刃）を斜めに立てて、幹に押し当てる。オガ屑が噴き出した。初めは、倒す側の幹に三角形の『受け口』を付ける。唸り音をあげながらバーが食い込んでいく。引き抜いたバーを水平にして、今度は三角形の底辺の部分切る。切った部分を取り払うと三角形が現れた。それが『受け口』。この直角方向にスギは倒れるのだ。

『受け口』の次は『追い口』。石村さんがスギの背後に回る。『受け口』の底辺の位置よりやや高みを水平に切っていく。切り口にクサビを打ち込む。小刻みに震えていた梢が、大きく揺れるようになり、やがて支えきれなくなつて傾き出す。目印の小枝の上に倒れ込んでいって、跳ねた。狙いどおりである。取り巻きから拍手が起こった。



木に三角形の『受け口』を付け(左)、『追い口』にクサビを打ち込む

きつかけは『木の家』 倒れ込んだスギに感動

——木に関心を抱いたきつかけは。

石村真弓さん 「木の家を建てたことがきつかけですね。木に目覚めちゃったんです。その工務店が、大黒柱や柱に使うスギ

を施主がチェンソーで伐り倒す『施主参加型』の家づくりをしていて、真冬に主人と参加したんです。上の娘と、まだ1歳にならない下の娘も一緒でした。

午前中は講師の方から、地元の木を使うことの意義や、チェンソーの取り扱いの注意点などの座学を受け、午後から山に入りました。もちろんチェンソーも、木を伐り倒すことも初めてで、緊張しましたが、息が白くなるくらい冷え込んでいたのにちっとも寒くなかったのは、興奮していたんでしょうね。

——チェンソー体験で、どんなところが印象的でしたか。

石村真弓さん 「やっぱり木が倒れるところですね。『追い口』に打ち込んだクサビの頭をハンマーで叩くと、いやいやするみたいに揺れていた梢が倒れ込んでいって、どーんと跳ねました。生き物を殺めたのだと実感しましたね。すごーい！ って娘が手をたたきながら感激の声をあげました。ほんとにもう、

すごい迫力。たぶん、そのときにわたしの中でスイッチが入ったんだと思うんです。

それ以来、車を運転しているときに木材を積んだトラックがそばを通ったりすると、「あの木はどここの山で伐ったんだろかね」とか「あの木材はどこに運ばれていくんだろかね」とか家族でそんな会話するようになりました。チェンソー体験のときに講師の方が、体験すれば山の見方が変わりますよ、と言われていましたけど、ほんとにそれとおりで、山が身近に感じられるようになりました。林業と

いう職業があるんだって実感したり、山の中で木を伐っている人たちがいるおかげで木の家を建てるのができたんだという感謝の気持ちがあわくようになりました。チェンソー体験をきっかけに、変わったんです」

陸前高田でボランティア 炎天下で薪づくり紅一点

2011年7月。東日本大震災で大きな被害を受けた陸前高田へ、石村さんは『ウッドラック』の相馬壮代表と向かった。津波で流された高田松原の7万本のマツを薪にしてネット

販売し、その収益金を全額復興

資金として陸前高田市に援助しよう——との呼びかけにボランティアとして参加したのだった。全国から参集した薪ストーブショップや薪ストーブ輸入代理店、ストーブユーザーなど20人のうち、石村さんは紅一点。茹だるような暑さの中、顔から汗を滴らせながら愛用のチェンソーで薪づくりに精を出す姿はまさに「ファイヤーウーマン」。

志たち16人が駆け付けた

石村さんはまた、県産材の家の良さを喧伝する「語り部」としても活躍している。2013年8月、青森市内で開催された『県産材住宅魅力発信フォーラム』のパネルディスカッションに、県産材住宅に暮らすユーザーの代表としてパネラーを務めた。

このときに意気投合した薪ストーブショップの面々は、ネットワークを築き、勉強会などを開催している。2013年4月に、函館の北側に位置する北海道茅部郡森町で開かれた『北の煙突掃除人集会』もその一つ。厳寒地北海道での煙突掃除の実習や勉強会を通じて、より安全で快適な薪ストーブライフの実現を目指そうと2日間開かれた。石村さんも早朝のフェリーで向かった。遠くは名古屋、三重から飛行機で、熱き有

このフォーラムは、青森県が、一般住宅への県産材の利用を推進することにより木材の地産地消や森林整備、地域経済の活性化につなげることを目的に開催。テレビ番組でお馴染みの渡辺篤史氏による基調講演の後、辻潔氏（日本林業調査会代表取締役社長）をコーディネーターとしてパネルディスカッションが行われた。辻潔氏がこう質問した。

——石村さんの家は青森スギを使って建てたそうですが、住み心地はいかがですか。

石村真弓さん 「真冬に裸足で歩いて冷たくありません。体



徐々に傾斜の角度を深くして倒れ込む



パネルディスカッションにパネラーとして参加した石村さん(右)

が縮こまららないのだから健康に良いわけです。自然の木の家を建てたのは、わたしがアレルギー体質だからで、化学物質の出ない自然の木の家を建てることしか選択肢はありませんでした。建てていただいた工務店は地元の青森スギを使った家づくりをされていて、担当者から、床に張るスギは表面が柔らかいから傷つきやすい、と前もって聞かされていました。実際に子供たちが物を落としたり

り、^{こま}独楽を回したりするとたちまち傷がつくから、新築のうちにはもったいなさもあつて、こらつて叱っていましたけど、暮らしているうちに気にならなくなりましてし、却つて小さい頃の傷もわが家の思い出になつていきます。あ、これは、独楽を回したときの傷だつて、懐かしくなつて触つたりしてね。床が多少傷ついたからつて家にも生活にも何ら支障のないことですし、表面が柔らかいからこそ真冬に裸足で歩いても冷たくないんです。健康に暮らせる無垢材は家づくりの最高の素材だと思つています。木に対する感謝の気持ちが高じて、キコリの資格まで取つてしまいました」

——チェーンソーにしても煙突掃除にしても危険の伴う作業ですが、ご主人は心配されていませんか。

石村真弓さん 「わたしが仕事に出かけるときに、無事に帰つてこいよ、つて主人に言われるんです。その気持ちは痛いほ



男顔負けの石村さんの堂に入った薪割り姿

どよく分かります。チェーンソーにも屋根の上にも常に危険は付きまといつているから、危険な仕事をさせたくないんですよ。でも、最近は、仕事をやめろ、とは言わなくなりました。わたしからチェーンソーや薪ストーブを取り上げてしまったら、もぬけの殻になつてしまうからですよ。それほど今のわたしにはチェーンソーも薪ストーブも切り離せない存在になつてしまいました。それは山の魅力なんです。木の力なんです」

石村さんの薪割り姿は堂に入っている。振り上げた斧を振り下ろせば、目の前の薪が二つに割れて弾け飛ぶ。小柄な体のどこにそんな力があるのか。急勾配の屋根にも臆することなく上つて煙突掃除もする、男顔負けのウーマンパワーである。

女性「キコリ」となった石村さんは、薪ストーブ店の仕事を通じて今後も森林整備につながる活動をしていきたいと意欲をみせる。

(関連98、102ページ)